

印象派を支えた共犯者

—画商 ポール・デュラン＝リュエル—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

西洋近代美術史に燦然と輝く印象派も最初から脚光を浴びたわけでない。無名の頃のモネ、ドガ、ルノワール、シスレー、ピサロらによる初の共同展は既存のアカデミーや評論家から酷評された。



ポール・デュラン＝リュエル

ただひとり彼らの可能性を見抜いたのが画商のポール・デュラン＝リュエル(1831-1922)だ。ポールは彼らの作品を率先して買い取り、展覧会を開き、経済的に援助した。フランス国内で評価を高めるのは困難だと判断してアメリカに進出し、海外から印象派ブームを巻き起こす。

画商という仕事はポールの登場によって内容が一変した。ただ完成した絵を売り買いするだけでなく画家と運命を共にする存在になったといっていだらう。ポールがいなかったら印象派の栄光もなかったと見做して過言ではない。

モネは語っている。「彼なしでは僕ら印象派の画家たちは餓死していただらう」。

ロンドンで運命の出会い

ポールはフランス・パリの画商の家に生まれた。父のジャン・デュランは文具・画材店から身を起こし、妻のリュエルとデュラン・リュエル商会を営んでいた。

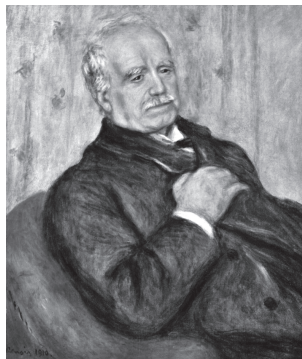
1865年に家業を継ぎ、バルビゾン派の自然主義

的な風景画や写実的な農民画を扱うようになる。バルビゾン派はパリ近郊のバルビゾン村を拠点とする画家たちの総称でミレー、コロー、ルソーらの作品を売買した。

1870年にプロイセン王国を中心とするドイツ諸邦とナポレオン3世・第2帝政下のフランスで普仏戦争が勃発し、イギリスのロンドンに避難する。徴兵を逃れてきたモネと出会い、同年12月に新たな画廊をニューボンド・ストリートに開設してフランス人画家の初の展覧会を開く。普仏戦争が終結して翌年パリに戻ると、モネ、ルノワール、ドガら新進気鋭の貧乏画家たちの作品を意識的に買い取っていった。

19世紀後期のフランスでは古代ローマの絵画を手本にして聖書や神話の世界を描いた歴史画が高く評価され、それ以外は低俗なものと蔑まれていた。保守的な王立美術アカデミーがサロン・ド・パリで開催する年に一度の国営公募展の審査に通らないと一人前の画家と認められなかった。

だがマネやクールベの写実主義を継承したモネらの前衛的画風は既存の画壇から徹底して嫌われ、サロン・ド・パリへの出展を拒否されるようになる。不満をつのらせた有能な画家たちはカフェに



ルノワールが描いた肖像画

集まって語りあい、新たな芸術のムーブメントとして印象派に結実していく。ポールも情熱的な輪の只中にいた。

罵声を浴びた展覧会

1873年、モネ、ルノワール、ドガ、シスレー、ピサロたちは「画家、彫刻家、版画家などの美術家による共同出資会社」を組織し、サロン・ド・パリから独立した展覧会を企画する。60フランの出資金を払えば誰でも自由に出展できる協同組合のような仕組みでポールも全面的に支援した。

初の共同展はサロン・ド・パリ開幕2週間前の1874年4月15日から1カ月間、キャピュシーヌ大通りにある写真館で開催された。画家ら約30人が160点を超える作品を展示し、のちに第1回印象派展と呼ばれる歴史的なイベントとなる。

印象派の名称はモネが出展した「印象・日の出」に由来している。ル・アーブルの港の風景を描いた作品で印象派の代名詞となった。

しかし当初は保守的な画壇がモネらを揶揄するために命名された。共同展の開幕早々、美術評論家のルイ・レロイが印象派展という見出しで新聞紙上にレビューを掲載する。「その筆使いの何たる自由さ、何たる奔放さ。描きかけの壁紙でさえ、この海景に比べればずっと出来上がり過ぎているくらいだ」と罵倒し、ルノワールが描いた裸婦像も「腐っていく肉の塊かたまり」などとアカデミーの重鎮たちから集中砲火を浴びた。

旧態依然の画壇では印象派の自由奔放な筆致は理解しがたいものだった。モネは「自然に対して自分が認識した感覚を表現する」として光や色や季節の変化を感覚的に再現しようとした。粗い筆のタッチは揺れ動く変化の象徴でありながら、逆に未完成の描きかけの象徴として批判された。

物議を醸した初の印象派展は経済的にも失敗に終わった。とはいえポールの姿勢は一貫して変わらなかった。1876年の第2回印象派展では自分の画廊を会場として提供する。再度のチャレンジも新聞では「自身を印象派と呼んでいる自称画家たちは、絵の具と筆を手にしてカンヴァスに向かうと、わずかばかりの色をでたらめにおき、それですべて終わりなのだ」とさんざん叩かれた。同年、ポールはモネに宛てた手紙で「私は君ら印象派と

やらの共犯者にされてしまったよ」と苦笑気味に書き記している。

追求すべきものがあれば

画廊の経営が苦しくてもポールは印象派の画家たちに対する経済的援助をやめなかった。とくにモネとルノワールとの絆は深く絵の具代から食費までサポートした。頻繁に文通し、未来を信じて励ましあっていた。ルノワールは永年の恩に報いるためにポールや娘のマリーテレーズとジャンスの肖像画を描いている。

1881年、モネと定期的に作品を購入する契約を結ぶ。モネの生活は安定し、続々と代表作が誕生していった。ポールは精力的にカタログを作成し、新聞・雑誌を使って印象派をアピールし、いわばプロデューサーとしての近代的な画商のスタイルを確立していく。旺盛な宣伝活動をまのあたりにしたモネは「僕自身は雑誌に書かれた意見を気にすることはほとんどありません。しかしわれわれの時代においては新聞や雑誌なしに何もできないということを認めなくてはなりません」とポールに手紙で伝えた。

1886年、新市場の開拓をめざして3人の息子と共に渡米し、ニューヨークで「パリ印象派の油絵・パステル画展」を開催する。全米初の印象派展は好評でポールは思わず「アメリカの大衆は笑ったりしない。買ってくれるのだ!」と叫んだという。

絵画に対する固定観念のないアメリカで印象派はストレートに受け入れられていった。息子たちは駐在してニューヨークの画家と印象派の作品を交互に展示する画廊を運営するようになる。

アメリカでの成功をきっかけにヨーロッパやロシアでも印象派展を開催していった。ポールは印象派を発掘した先駆者として世界でもっとも有名な画商となる。

道のりは平坦ではなかった。破産寸前に陥ったときも「襲いかかってくる不幸に耐えるには忍耐と勇気が必要かもしれないが、追求すべきものがあれば決してめげてはいけななんだ」とモネに宛てた手紙でお互いを奮い立たせた。

90歳で永遠の眠りについたとき、数々の名画が脳裏に甦ってきたかもしれない。やはり自分の眼は正しかったと。